

中野孝次

清貧の思想



文春文庫

せい ひん し そう
清 貧 の 思 想

定価はカバーに
表示してあります

1996年11月10日 第1刷

著 者 なか の こう じ
中野孝次

発行者 新井 信

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

T E L 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-752303-5

文春文庫

清貧の思想

中野孝次



文藝春秋

いま国外旅行をすると、どの国でも日本及び日本人に対する関心が高いように感じられる。むろん理由の第一は、クルマ、電気機器、エレクトロニクス、時計、カメラなど、日本製品の大量進出にあるだろう。日本が非常に高度な工業技術と生産性を持つことはこれらの製品でわかるが、これを作った日本及び日本人とは一体いかなるものか、物は見えても人間の顔が見えないというのが、関心を高める理由になっているようである。実際わが国の政府は海外に対する自己宣伝を怠りすぎているから、そういう要求が起こるのももっともだと思われる。

理由の第二は、しかしそれと相反するもので、逆に日本人の大量の海外渡航に由来するもののようなのである。史上かつてなかったほどの数の日本人ツーリストが各地各国に出掛けるし、また企業の長期滞在者の数も少なくない。かれらの行動をじかに見て「これが日本人か？」という疑問を抱く。その疑問は概して否定的な性質のものだが（本文第十六章参照）、それもまた日本及び日本人への関心を高める理由になっているのは皮肉である。日本人とはただホモ・ファールベル（物を作る人）であって、物を作って売るだけの者なのか、それ以外の文化を持たないのか、というわけだ。

それ以外にもまだ理由はあるだろうけれども、わたしが受けた印象ではほぼその二点によるようであった。そして何かにつけて日本及び日本人について質問されるわけである。

わたしは話を求められるたびにいつも「日本文化の一側面」という話をすることに決めて来た。内容は大体日本の古典——西行・兼好・光悦・芭蕉・池大雅・良寛など——を引きながら、日本には物作りとか金儲けとか、現世の富貴や栄達を追求する者ばかりではなく、それ以外にひたすら心の世界を重んじる文化の伝統がある。ワーズワースの「低く暮し、高く思う」という詩句のように、現世での生存は能うかぎり簡素にして心を風雅の世界に遊ばせることを、人間としての最も高尚な生き方とする文化の伝統があったのだ。それは今の日本と日本人を見てはあまり感じられないかもしれないが、わたしはそれこそが日本の最も誇りうる文化であると信じる。今もその伝統——清貧を尊ぶ思想と云っていい——はわれわれの中であって、物質万能の風潮に対抗している。それは現代の日本の主たる潮流ではないからあえて「一側面」と遠慮しておくが、実はわたしはこれこそが日本文化の精髓だと信じているのだと、古典の詩歌を引きつつ、わたしの「清貧の伝統」と考えるところを話して来たのだった。

かつて明治時代に『日本及び日本人』という国粹主義の雑誌があり、戦時中の皇国主義的国粹主義の支配下に青年期を送ったわたしには国粹主義くらい嫌悪すべきものはな

かったのに、そのわたしが齡をとってこうして結果的には、かれらと同じように『日本及び日本人』の宣伝をすることになったのは、これもまた皮肉な成行きであった。

ただ、講演では話がどうしても大雑把になる。充分に意をつくせぬことのほうが多い。話そうと思っていながら話せなかったこともある。またそれ以上に、話しているうちに自分の認識や知識の不充分さに気づくこともある。これはたんに外国人向けの日本文化案内には留^{とど}まらないのだ、自分自身のためにももっと正確に知り、認識を深めなければならぬ、と感^{かん}じて来たということもある。

そういう気持が嵩^{こま}じて来て、いつかはこれを書くことで確かめておかねば、と思っていた。が、こういうことは内心で思っ^{おも}つても機会がないとなかなか実行できないもので、そのままに打^う過ぎていたところ、たまたま草思社からその話を書くようにすすめられた。いい機会だと思^{おも}つたが、これもそのままにしておいた。ところが今年の正月元旦、何か書き初めをと思^{おも}い立^たつて原稿用紙に向^むかったとき、ふとこれを書く決心がついて書き出したら、思いがけず自分でも興^きが乗^のつて、以後毎日、他の仕事を全部放^{はな}擲^てして書きつづけることになったのは、われながら驚^{おどろ}きであった。こんなことはわたしとしても初めての体験である。

「I」と名付けた十五章に書いたのは、わたしがそのつど話して来たこと、ないし話そうと思^{おも}いながら充分に話せなかつたことである。日本の読書人には周知の事柄で珍しく

ないこともあえて記してあるのは、話す相手が外国人だったためととっていただけだ。そしてこの十五章でとりあげた話を材料としてかれらに何を訴えようとしたか、わたしがそれをどう思うかを記したのが、「Ⅱ」と題した部分で、むしろ主眼はここにある。これはあえて言えばわたしの祈りのごときものである。そうあってほしいという話である。そのためにいささか美化している向きもあるだろうが、それがわたしの念願であることには間違いない。

いま地球の環境保護とかエコロジーとか、シンブル・ライフということがしきりに言われだしているが、そんなことはわれわれの文化の伝統から言えば当り前の、あまりにも当然すぎた言うまでもない自明の理であった、という思いがわたしにはあった。かれらはだれに言われるより先に自然との共存の中に生きて来たのである。大量生産＝大量消費社会の出現や、資源の浪費は、別の文明の原理がもたらした結果だ。その文明によって現在の地球破壊が起ったのなら、それに対する新しいあるべき文明社会の原理は、われわれの祖先の作りあげたこの文化——清貧の思想——の中から生れるだろう、という思いさえわたしにはあった。

一個の文士の夢と嘯うなら嘯え。わたしはそんな夢のような願いをもこめてこれらの話をして来た、ということだけが事実である。

清貧の思想*目次

I

一、心の内なる律を尊ぶ
本阿弥光悦と肩衝の茶入れ
15

二、慳貪にして富貴なることを嫌う
本阿弥妙秀の暮しと生き方
22

三、省みて疾しければ己れなし
本阿弥光徳、光甫の刀を見る目
33

四、三界は只心ひとつなり
鴨長明と方丈の庵
41

五、囊中三升の米、炉辺一束の薪
越後五合庵での良寛
50

六、独り奏す没絃琴
良寛、山中の沈黙行
63

鴨長明が讃えた芸道一筋の名手たち

七、数奇の心、数奇者のみが知る

子供と遊ぶ良寛の内なる世界

八、つきてみよ、ひふみよいむなや

池大雅の暮しと人となり

九、書画に一点の塵気なし

桃源郷に心を遊ばせる与謝蕪村

十、月天心貧しき町を通りけり

蕪村、市井に住むことこそ己れの風流

十一、大隠は朝市に隠る

橘曙寛、雨の漏る陋屋に万巻の書

十二、歌よみて遊ぶほかなし吾はただ

吉田兼好の死生観とその普遍性

十三、死を憎まば、生を愛すべし

風雅に身を削る松尾芭蕉

十四、一句として辞世ならざるはなし

135

123

112

103

96

85

76

68

十五、旅で死ぬ覚悟の芭蕉に見えた景色
野ざらしを心に風のしむ身かな
146

II

十六、清貧の思想——日本文化の一側面
利に惑ふは愚かなる人なり
157

十七、古代インド哲学と良寛の同質性
永遠の生と出会うために
165

十八、花を愛し孤独に耐えきる西行
さびしさに堪へたる人のまたもあれな
180

十九、清貧とは清らかで自由な心の状態
持つことと在ること
191

廿、自然の中のいのちの気配に耳をすます
うれし顔にも鳴くかはづかな
202

廿一、骨もまた清からん
現実の無残な相をも直視する精神
212

廿二、清く貧しく美しく
庶民に生き続けてきた清貧の思想
222

廿三、誰の人が足らずとせん
何が必要で何が必要でないか
232

廿四、諸縁を放下すべき時なり
われらいかに生きるべきか
241

参考文献 255

解説 内橋克人 257

I

わたしがこれから語ろうとする話は、日本でもいまではあまり聞かれなくなつたが、たしかにかつてこの国に生きていた人たちの物語である。たんにそういう人たちがいたというだけでなく、かれらの生き方はいわば思想となつて代々尊まれて来たのもあつた。それは一言でいえば、これもいまは廢語にひとしい言葉になつてしまつた「清貧」という語であらわすしかない「清貧の思想」ということになるが、抽象的にそれを語るよりも具体的に事例をもつて示したほうがよくわかつてもらえるのではないかと思うので、早速その話に入る。

本阿弥光悦と肩衝の茶入れ

一、心の内なる律を尊ぶ

まずあの本阿弥光悦ほんあみこうえつ（永禄一〜寛永十四／一五五八〜一六三七）のエピソードから始めよう。

光悦はいまでは書と、黒楽赤楽の茶碗と、船橋の時絵ときえなどでばかり知られているが、この人が生涯にわたつて最も好んだのは茶の道であつて、彼は当時茶人としても有名であつたのだ。光悦をよく知る文人灰屋紹益はいやしやうえき（慶長十五〜元禄四／一六一〇〜一六九一）は、